

「私たちの防災に関する意識調査」

指導教員：講師 宮城 和美

I. 目的

近年では、毎年のように自然災害が頻発し、甚大な被害が発生している。富山県は全国的にみて災害が少ないイメージがあるが、過去の歴史を振り返れば地震、水害、季節風による豪雪に見舞われることもあったとされている。また、政府が提唱する災害対策用の備蓄品量の目安は、3日間程度とされている。

そこで、私たちは本学に在学する学生・教職員に防災に関する意識調査をすることにした。

II. 方法

期間：10月22日～11月11日

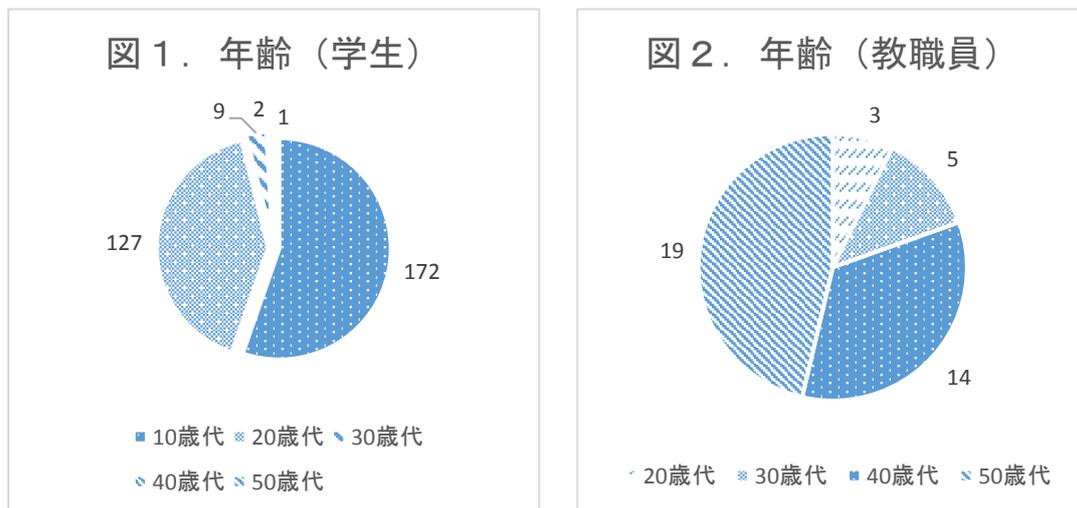
対象：本学の全学科在学生及び教職員

調査方法：アンケート

III. 結果

本学の学生311人・教職員41人を対象にアンケートを取った。

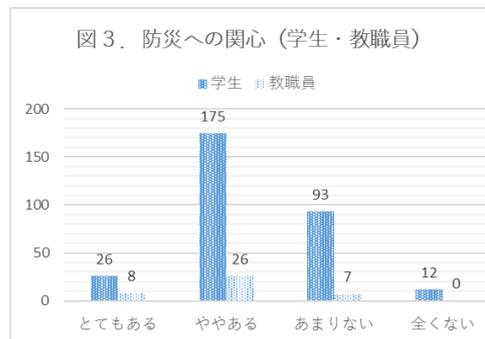
1. 年齢について（図1. 2）



学生の年齢は10代172人、20代は127人、30代は9人、40代は1人、50代が2人だった。教職員は、20代が3人、30代が5人、40代が14人、50代が19人だった。

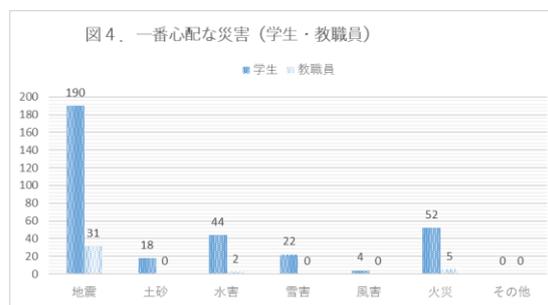
2. 防災の関心について (図3)

「防災に関心がややある」という回答が学生・教職員ともに多く、学生 175 人、教職員 26 人だった。学生の回答で、二番目に多かったのは「防災に関心があまりない」であり、93 人だった。教職員で二番目に多かったのは、「防災に関心がとてもある」で 8 人だった。



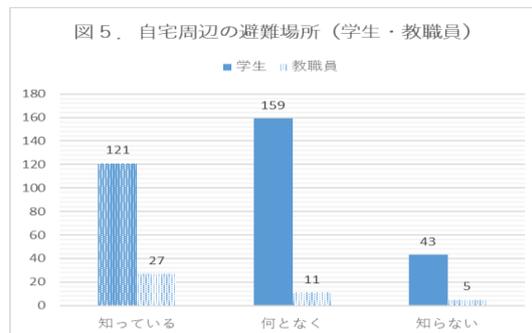
3. 1番心配な災害について (図4)

1番心配な災害では、「地震」という回答が学生・教職員ともに多く、学生 190 人、教職員 31 人だった。学生・教職員ともに2番目に多かったのは、「火災」で学生 52 人、教職員 5 人だった。

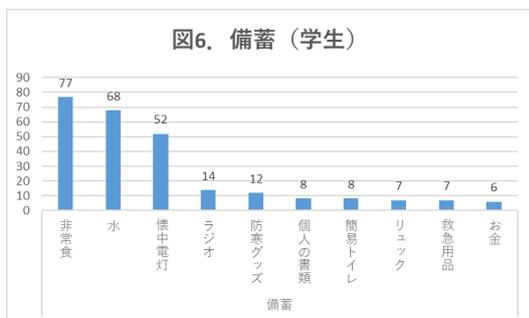


4. 周辺の避難場所について (図5)

自宅周辺の避難場所では、学生の回答では、「何となく知っている」という回答が1番多く、159 人だった。教職員の回答では、「知っている」という回答が1番多く、27 人だった。学生と教職員で避難場所の周知力に差が出た。



5. 発生時の備蓄について (図6. 7)



学生・教職員ともに1番~3番は同じ備蓄品であった。最も多い回答は「非常食」で、学生

77人、教職員17人だった。2番目に多かったのは「水」。3番目に多かったのは「懐中電灯」だった。学生では、水68人、懐中電灯52人。教職員では、水17人、懐中電灯6人だった。その他にも、学生では「ラジオ」や「防寒グッズ」、「個人情報に関する書類」などの回答もあった。教職員では、「ガスコンロ」や「乾電池」、「ビニール袋」などの回答があった。

IV. 考察

今回、調査を行ってみて、「防災に関心をもっている人」の中で、特に心配な災害については、学生も教職員も「地震」と答えた人が多かった。その理由として、現在日本の至るところで地震が多く発生しているため意識が向けられていると考えられる。

避難場所の認識に関しては、学生と教職員で大きく差が出た。学生は、「何となく知っている」、教職員では「知っている」と答えた人が多かった。そのことから、教職員に関しては、何十年前に阪神淡路大震災があったことや、何歳の頃に豪雪があったなどの、記憶から、安全な場所に避難するためにも、避難場所を認識しておく必要があるのではないかと考えられる。学生でも「知っている」と答えた人も多くいたが、家族から教えてもらっていたり、自分で調べたりしているのではないかと思う。また、防災発生時の備蓄についての本学の学生及び教職員ともに、「非常食」、「水」、「懐中電灯」の順での回答が多かった。日本気象協会の2018年の備蓄調査では、「水」、「ティッシュペーパー」、「除菌ウェットティッシュ」の順に多くの回答がみられた。そのことから、健康や、生活を維持するための備蓄をして、災害に備えているのだと考えられる。

いざというときに自分の命・安全を守るためにも、避難場所をハザードマップで確認し、家族と共有することが大切になってくるのではないかと考えられる。

V. まとめ

学生と教職員による防災への関心については、学生・教職員ともに「ややある」という回答が最も多く見られた。今よりも防災に関する知識を高めるためには、日頃からニュースを見ることや、日本で起きている災害に興味をもつことや、地域で行われている防災訓練に積極的に参加することなどが必要だと分かった。

また、ハザードマップに関心を持ち、自宅周辺の避難場所を、定期的に確認することも必要である。備蓄のアンケートでは、学生・教職員ともに非常食が1番多いという結果になった。食料品の備蓄においては、政府が推奨するローリング・ストックと呼ばれる方法がある。日常的に災害時に必要なものや、食料を使用した分だけ買い足すことが必要である。そうすることで、常に家庭に新しい非常食を備蓄するという「買い替え」ではなく、「消費」をしながら行う方法をすると、効率よく備蓄することができることが分かった。

富山県は災害が少ない県ではあるが、突然起こりうる事態に急に慌てることがないように、日頃から意識しておく必要があると考える。

引用文献

- 1) 国土交通省 「近年の自然災害の発生状況」
- 2) 富山県公文書館 「災害にみる富山」
- 3) 伏木富山港 「自然災害が少ない」
- 4) 日本気象協会 「家庭の備蓄状況 2018」
- 5) 介護福祉士養成講座 12 発達と老化の理解